

## 福島浜通りと首都圏の中高生による参加型対話の課題と成果

### (1) 甲状腺検査を巡る中高生による「白熱教室2016」—その趣旨と仕組み—

Agendas and Issues of Participatory Dialogues by Junior-High and High School Students from Fukushima  
Hama-doori and Capital Area

(1) "Exciting Class 2016" by Junior- and High Students on Thyroid Screening Test - Aim and Arrangement -

\*澤田 哲生<sup>1</sup>, 中山 知恵子<sup>2</sup>, 木村 菜摘<sup>3</sup>

<sup>1</sup>東工大, <sup>2</sup>神大附属中高, <sup>3</sup>東北大

福島県浜通りと首都圏横浜市の中高生合計12名が、「甲状腺検査って・・・どうなんだろう？」のテーマの下参加型対話を行った。予備知識なしから出発して、問題を共有し解決への糸口を描き出すことが課題であった。その結果、中高生の自助力の中から取り組むべき問題が具体化した。

**キーワード**：白熱教室，甲状腺検査，中高生，参加型対話，Socio-scientific Issues (SSI)，放射線教育

#### 1. 緒言

2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故以降、原子力や放射線に関わる権威(authority)は失墜したままにある。その権威の構築を旨として、福島県全域の子供を対象に実施されている甲状腺検査に関して、「発信し共有して欲しいことがある」という福島浜通りの高校生の意志を端緒として参加型対話の場である『白熱教室2016』を開催した。

#### 2. 目標と方法論

##### 2-1. 目標と目的

同様の権威の失墜は1990年代の英国におけるBSE問題でもあった。英国は20年以上かけて、Socio-Scientific Issue (SSI)と称する学術的な動きが興り信頼回復を成し遂げた。SSIの目標は、1) 科学的知識を待った市民の養成、2) 社会的責任の内省的な育成、3) 弛まぬ思索と論理的議論、4) 批判的思考の発揮である。『白熱教室2016』は、これらの目標を意識し、予備学習を前提とせず「知識ゼロベース」から出発し、対話を通じつつ内省を促し公共性のある論点(issues)を見える化することを目的とした。

##### 2-2. 場のデザインまたは方法論

『白熱教室2016』という場をデザインするにあたり、以下に留意した。(1)中高生の自主性を重んじ、アドボカシー(論理的科学的政策提案)に到達すること、(2)ファシリテーションは同世代が行う、(3)一般参加者との相互交流、(4)共考による相互信頼の構築、(5)発信力(共有能力)の自己養成。

##### 2-3. 『白熱教室2016』

2016年12月11日(日)午後、約3時間に亘り東工大大岡山キャンパスにて実施し、福島の高校生による問題提起から始めて12名の中高生らは3項目の政策提案(アドボカシー)にたどり着いた。その模様は同日夜のNHKニュースで報じられた。

#### 3. 結論

『白熱教室2016』では、公共性のある論点の見える化からその共有を、参加型対話を通じて実践し、3項目の政策提言を行った。そのことを世間に向けて発信した。また、中高生の総意として第2回を実施することが意思決定された。

**参考文献** [1] D.L. Zeidler (Ed.), *Springer* (2003).

\*Tetsuo Sawada<sup>1</sup>, Chieko Nakayama<sup>2</sup> and Natsumi Kimura<sup>3</sup>

<sup>1</sup>Tokyo Tech., <sup>2</sup>Kanagawa Univ. High, <sup>3</sup>Tohoku Univ.